

錯覚

文学部長 潮見 浩

何はともあれ卒業おめでとうございます。文学部4か年を終え、あるいは文学研究科博士課程前期2か年を終えて、明日から君たちは社会人としての第一歩をあゆむことになる。ごく少数の人々はさらに進学して、またあらたに勉強に打ちこもうとしている。

卒業とはどういうことだろうか。まず手近な辞書を引いてみると、卒業——学生・生徒がその学校の教育課程を全部おえること／ある範囲の物ごとを体験しおえてしまうこと／悪いことは——した、などとある。これを読んで、私は少しは安心した。というのは、君たちが就職したあと、私たちの耳に、近ごろの大学卒業生はあいさつの仕方も知らない、大学で何を勉強したのか、知らないことが多すぎる、すぐに役に立たないなどという不満がきこえてくる。最初のあいさつ云々は、大学教育というよりは家庭の問題でもあり、不満を申したてる人にもその責任の一端もあるので、これにはあまり動じない。しかし、後段の勉強不足であるとかすぐに役に立たないなどという不満中傷については、教師たるものは内心忸怩たるものを感じざるをえない。しかし、さきの辞書にもあるように、卒業とは教育課程を全部おえたということを示すのだから、それが現実の就職にただちに役立つかどうかは、じつは保証されていないのである。これは教師の弁解ではない。それは大学を卒業すれば、何でもこなせるのではないかと期待する社会の側の錯覚であり、卒業生も多少それに便乗しているふしもない。

私の教えている文学部考古学専攻生が、埋

蔵文化財関係の仕事につくとすると、ただちに何十人、時には百人以上の作業員をみながら発掘作業に従事することになる。もちろん大学では考古学の実習として、発掘調査の基本は教えはする。それで明日から何が出土するかわからない広大な遺跡の現場が、まかさされるわけがない。雇う側は、国立大学の数少ない考古学専攻の卒業生であるのだから、何でもこなせるだろうという、期待をこめた錯覚をする。卒業生諸君は、多かれ少なかれこのような錯覚に対決させられるであろう。現実にはきびしい。この時自分にはまだそれだけの実力のないことを、明言するのはむづかしい。あるいは若者にとっては、自尊心が許さないかも知れない。教師はもはやこれに何の手をかすこともできない。

さいわい文学部生には、最後の1年間には卒業論文を手がけてもらった。大学院生は修士論文を完成させた。自分の必要な資料をこつこつと集め、整理し、自分なりの論を組み立てて、一つの主題に立ち向ったはずである。その方法は、たぶんいままであまり経験しなかった自分自身による思考と、それによって到達しえた創造のよろこびをえたにちがいない。人によっては大なる反省がのこったにちがいない。私は文学部の卒業生が、教育課程を全部おえたなかの最大の収穫は、ここにあると思う。知識は十分でないとしても、自信をもって進んでいただきたい。諸君によせられる期待をこめた錯覚は、各自の努力によって解消させねばならないが、あわてることはない。